様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年３月２５日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520231
研究課題名（和文）：パスカル『プロヴァンシアル』の多角的検討と思想的背景に関する研究基盤の構築
研究課題名（英文）：A Synthetic Study of Pascal's *Provincial Letters* and a Formation of a Documentary Basis on Its Ideological Background

研究代表者
永瀬　春男（NAGASE HARUO）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：60135100

研究成果の概要（和文）：
パスカルの第２の主著『プロヴァンシアル』の詳細な読解を通して、論争初期のアルノー弁護と、中～後期におけるイエズス会の道徳説批判のいずれもが、先立つ科学論争によって獲得された方法を十全に活用しており、その核心は論敵への言語批判にあることを示した。また、蓋然的意見の教説批判の思想的背景を検討することにより、『プロヴァンシアル』の道徳論と『パンセ』の意想外な呼応関係を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
This study, based on a minute reading of Pascal's *Provincial Letters*, shows two things : firstly, both his defence of Arnauld and his rejection of the Jesuits' moral make a thorough use of the method he acquired from his scientific disputes ; and secondly, the core of his argument lies in his criticism of adversaries' language. In addition, some correlation, so far unknown, between *Provincial Letters* and *Pensées*, can be pointed out by examining the ideological context of the Jesuits' theory of probabilism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：仏文学、パスカル、プロヴァンシアル、ジャンセニスム

１．研究開始当初の背景

筆者は、本課題以前に科研費を得て行った

パスカルの計算機に関する総合的研究（単独）、および小柳公代氏（愛知県立大学、当時）を代表とするパスカルの真空実験に関する共同研究（外部協力者、情報提供者）を通して、パスカルの主著『パンセ』に見られる多くの主題や鍵概念（「秩序」、「圧制」、「現象の理由」、生半可な学者の批判、「民衆の意見の健全」等々）が、先立つ科学的業績から決定的な影響を受けていることを明らかにしてきた。これらの成果を踏まえ、科学的業績を支える思想との連関という視野からパスカルを再検討することが、新しい課題として浮上してきた。また、筆者は従来より、『パンセ』の位置を17世紀の護教論的伝統のなかで把握しなおすことにも関心があり、そうした検討から獲得した知見も、新しいパスカル論に活用できる期待があった。本課題は以上の背景と動機をもとに、これまでに収めた成果を『プロヴァンシアル』読解に生かすことで、同作品の新たな相貌を提示し、科学論文から『パンセ』へ至る思想発展の連鎖の中に同作品を正しく位置づけることをめざした。

同時に、わが国において必ずしも研究が盛んとはいえない『プロヴァンシアル』について、今後の研究のための基盤となるべき書誌と年譜の作成を課題とした。

２．研究の目的

パスカルの『プロヴァンシアル』に関する多角的・総合的研究を主目的とする。具体的には、(1)各書簡自体を綿密に検討すること。(2)計算機製作にはじまる科学論争によってパスカルが獲得した諸概念・諸方法が『プロヴァンシアル』論争を通して成熟していく過程を考察すること。(3)筆者が過去にフランス国立図書館で行ったジャン・ド・シヨン、ジャン・ブッシェら 17 世紀護教論の検討から得た知見を、『プロヴァンシアル』論争の思想的背景の理解に生かし、論争両陣営によって使用される用語や概念の理解を深めることで、従来看過されていた論争の射程を明らかにすること。およそ以上の検討により、『プロヴァンシアル』の新たな相貌を提示し、科学的業績から『パンセ』へ至る思想発展の連鎖の中に、この作品を正しく位置づけることをめざす。

以上の主たる課題加え、プロヴァンシアル論争の思想的背景たるジャンセニスムとポール・ロワイヤルに関して、詳しい書誌と年譜作成の基礎作業を行い、わが国における研究基盤の構築をもめざす。

３．研究の方法

本研究の主たる課題は、作品『プロヴァンシアル』の綿密な読解であり、Cognet版、大作家叢書版など、主要諸版の注釈と近年の研究文献を参照しつつ、各書簡を丹念に分析・読解する。その際、パスカルが科学論争（計算機製作および真空論争）と関連文書において練りあげ、後に『パンセ』において重要な役割を演ずることになる鍵概念と、書簡形式による論駁方法が、イエズス会との論争においても、いかに有効に働き、かつどのように成熟していくかを、中心的に検証する。とりわけ、小品『真空論序言断章』と『幾何学的精神について』において展開される命名論や定義論に依拠する言語批判の論理が、『プロヴァンシアル』論争において演ずる役割の重要性に着目しつつ、分析を進める。

また、イエズス会系良心例学が依拠する「蓋然説」の批判にあたり、同時代の護教論、政治論、証明論、道徳論などさまざまな領域で論議の対象となった「思慮」概念を、パスカルがいかなる観点から取りあげているかを検討することで、『プロヴァンシアル』論争の理解に新たな照明を当てる。

以上の主要課題に加え、わが国における基盤

構築作業として、詳細な『プロヴァンシアル』関連書誌と年譜を作成する。前者は敵味方両陣営から刊行された文書類を含み、後者は背景となるジャンセニスムとポール・ロワイヤルの思想動向を含むものとする。書誌作成は、基本的にはフランスの研究者による成果に依拠しつつ、『プロヴァンシアル』、ジャンセニスム、ポール・ロワイヤルにかかわるものを抽出・整理し、邦語文献を加えて書式の統一を図る。年譜については、各種研究文献に依拠しつつ、項目ごとに正確を期しつつ組み立てていくという地道な方法を取ることになる。

４．研究成果

４つの公刊論文と２回の学会発表を通して、以下の成果を収めた。

(1) 「『プロヴァンシアル』におけるアルノー弁護と科学論争」

パスカルが先立つ科学論争（計算機製作、ノエル神父との真空論争）およびそれを契機に生まれた科学論的小品（『幾何学的精神について』、『真空論序言断章』）において提示した方法、すなわち感覚の重視と独自の定義論にもとづく言語使用のモラルの遵守という主張が、初期『プロヴァンシアル』におけるアルノー弁護のための論争的方法として十二分に活用されている事実を明らかにした。つまり、「事実問題」に裁定を下すべき手段としての感覚の役割、および「近接能力」、「十分な恩寵」といった神学用語の名称と意味内容の関係の吟味等にかかわる主要な議論は、科学論争の再現の趣があること、『プロヴァンシアル』が、ある意味において、科学論争を通して獲得した方法の、宗教問題への適用という面を強くもつことを明確にした。これによって、初期の科学的業績から、『プロヴァンシアル』論争を経て『パンセ』に至る思想の深化の軌跡が、従来以上に豊かに展望できる可能性が開けてくる。

(2) 「『プロヴァンシアル』における道徳論争と言語批判」

(1)の論文で示したように、論争初期の中心テーマであるアルノー弁護論は、先立つ科学論争とそれを契機に生まれた科学論的小品（『幾何学的精神について』）においてパスカルが提示した方法を十二分に活用しており、『プロヴァンシアル』論争とは、ある意味で、科学論争を通して獲得した方法の宗教論争への適用という性格を強く示していた。本論文はこの視点を受け継ぎ、中・後期の主題たるイエズス会の道徳説批判が、引用の誠実さと視覚によるその判断、およびパスカル独自の命名論・定義論にもとづく言語批判、という２つの観点からなされている事実を明らかにした。パスカルにとってイエズス会の道徳説は、個々の項目の乱脈振りとは別に、言語使用における不誠実、言語使用のモラルからの逸脱という、見逃しがたい特性をもつのであり、結局、初期から後期にいたる論争全体が、言葉をめぐる争い、言語使用の正当性を問う争いである事実を究明した。

(3) 『プロヴァンシアル』における「蓋然説」と「思慮」

パスカルはイエズス会の道徳説、特にその「蓋然的意見の教説」を批判するにあたり、それを人間的・政略的な「思慮」だと論難した。「思慮」なる概念は、古代ギリシア（アリストテレス）に発し、中世スコラ学（トマス・アキナス）において徳論の体系中に位置づけられたものであるが、近代フランスにおいては政治論（為政者に必須の徳）、護教論（賭けの議論）、道徳論（蓋然説）という異なる複数の文脈のなかで再評価を受け、他方で厳しい批判にも遭遇した。蓋然説や「思慮」の称揚は、普遍的懐疑を特徴とするバロック

的時代精神を共通の歴史的背景としてもっているが、「蓋然的なものでは満足できない」パスカルは、究極において「思慮」の概念を廃棄したのであり、そうした姿勢に『プロヴァンシアル』の道徳論と『パンセ』の呼応する点が認められる。小論ではこうした論点を明らかにした。「思慮」概念を手がかりとするこの観点は、今後、上記３領域（政治論、護教論、道徳論）の他、証明論、「賭け」論等々、哲学や自然科学をも包含するいっそう広範な領野における確実性と蓋然性の相克という、時代的重要課題を領域横断的に検討するための重要な足がかりになるものであり、豊かな展望を約束するものと思われる。

(4)『プロヴァンシアル』研究のための書誌および年譜の作成

これについては、なお作業は続行中である。書誌、年譜ともに扱う対象が膨大である上、常に増加し続けるという性質上、完成ということはないが、努力を継続し、近い将来何らかの形で公開したいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 永瀬春男、『プロヴァンシアル』における道徳論争と言語批判、岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要、査読無、No. 29、2010、pp. 13-25

② 永瀬春男、『プロヴァンシアル』における「蓋然説」と「思慮」、岡山大学ヨーロッパ言語文化研究、査読無、No. 28、2009、pp. 17-35

③ 永瀬春男、『プロヴァンシアル』におけるアルノー弁護と科学論争、岡山大学ヨーロッパ言語文化研究、査読無、No. 27、2008、pp. 21-41

④ 永瀬春男、パスカルの計算機と負数、テクストの生理学（朝日出版社）、査読無、2008、pp. 219-230

〔学会発表〕（計２件）

① 永瀬春男、パスカル『プロヴァンシアル』における論争の論理、日本フランス語フランス文学会中国・四国支部会、2007 年 12 月 1 日、香川大学教育学部

② 永瀬春男、初期『プロヴァンシアル』と幾何学的論証、大阪大学フランス語フランス文学研究会、2007 年 9 月 29 日、大阪大学待兼山会館

６．研究組織

(1)研究代表者

永瀬　春男（NAGASE HARUO）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：60135100

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし